

## William Golding の *Lord of the Flies* における寓意性について

宮 井 敏

William Golding の *Lord of the Flies* は高度に政治的な小説である。ここでいう「政治」という言葉の意味はもちろん、国家に固有の複雑な「政治現象」のことではなくて、ある権力を獲得したり、維持したりする場合の争いや、権力を行使したりする際の活動などを含めた、あらゆる社会集団にみられる権力現象の原型としての政治、という意味である。その点で、丸谷才一氏が<sup>①</sup>、この小説を政治小説であると規定していられるのはたしかに肯綮に値しようが、それは上にのべたように、作者が現代社会のさまざまな欠陥を、人間性の奥にひそむ悪にまで溯って解明しようとして、文明の粉飾を切り捨てた場所での、二人の少年に代表される二つのグループの間の権力をめぐる争いというかたちで、政治現象の prototype を示してみせようとしているから、なのであって、今日の時代性をおびた topical allusions が作中に散見するからでは決してない筈である。だから、氏が同時にこの作品を「現代政治への批判の書である」と断じておられるのは些か問題がありはしないか。というのは、この孤島における少年達の集団生活に投影している topicality はこの場合、およそあまたの island novels が不可避的にもたざるを得ない最少限度の現代社会との bridge なのであって、それが作者の直接の目的ではなかろうからである。むしろ作者は、かねて反時代性を標榜してきた人であり、できればいつでも、時空の制約をこえて、普遍的状況の下で人間の根元的なあり方を展開してみたかった筈だからである。imaginative writer とその属する時代との関連如何とい

う質問に答えて、作者が人間の状況を *sub specie aeternitatis* つまり永遠の相の下にえがいてみせるのだ、といった意味もまたそこにあるかとおもわれるのである。

さて、彼が処女作であり、また代表作ともなったこの作品をかき上げた1954年まで、つまり彼の43歳のころまで Golding が各地で英語の教師をしながら、黙々と自問しつづけて来た問題は終始、人間とは何か、という究極原理の問題であり、人間の形而上学的意味ということであった。そうして、こうした根本問題にとりくむ彼の基本的姿勢は、はっきりと anti-humanistic な立場に立っていたとみることが出来る。彼が人間の完全性に対しては、つよく懐疑的であり、進歩の観念や、皮相的な合理主義に対しても否定的な態度をとっていたことは、その後のいくつかの作品からもうかがえるのであるが、彼がきわめてつよい社会的関心を抱きながらも、時代の不安と混迷の根源を、社会的な外的条件の中にはもとめないで、人間性そのものの不完全さの中に見出そうとしている態度に、我々は T. E. Hulme の anti-humanistic な発想の影響をよみとることが出来るのである。本来非連続であるべき、絶対者と生命現象と自然界からなる世界像を、人間の無限の可能性を信じてみるとき、つまり、深淵をさしはさんである非連続の状態を連続とみるとき、無秩序と荒廃ははじまり、人は神を失なうにいたる、と Hulme はいう。Golding は *The Spire* (1964) においては、神をおそれざる人間の傲慢と挫折をえがき、この *Lord of the Flies* では、神を知らぬ人間の無智と悲慘をえがき出しているが、original sin を扱った *Free Fall* (1959) などをもふくめて、作者が一貫して追求してきたテーマは、文明の虚飾をほぎとって見た、神を失った人間社会の混迷と荒廃であったわけであり、またその意味で、この小説は高度に宗教的な作品であるとも見ることが出来るのである。

“*Lord of the Flies*” というのは、もともとヘブライ語の “*Baal-zebul*” という言葉の英語訳であるが、この *Beelzebub* ベルゼブブというのは、

元来墮落天使 fallen angels の一人で、Milton の *Paradise Lost* の中で はサタンにつぐ魔王 prince of devils であり、サタンに向かって、今度新たに創造された楽園をおそって、そこにいる人間を誘惑しようと提案する悪魔なのであるが、また本来はフェニキア人の豊穡神でもある。その *Beelzebub* の英訳 *Lord of the Flies* をこの小説の題名とした作者の意図は、一つには人間の獣性の跳梁に対するさまざまな寓意の集中的表現としての悪の顕示と、それによる神の不在証明であり、二つには、この自然条件にめぐまれた南海の楽園での、少年達の示す自からなる原始への回帰、獣性への傾斜にはじまる人間の転落、楽園の喪失であったと見る事が出来るのである。

こうしたテーマをかかげて、「社会の欠陥を人間性の欠陥にまで溯って跡づけよう」とするとき、その表現の形式として当然考えられるのは寓話の形式であろう。Golding が、従来の優雅で sophisticate された文学形式に対抗して、古典的な、イギリス文学としては正統に属する寓話文学の復権を希ってそうした、というだけではなく、さきにもべた、彼が永年あたためつけて来た壮大なテーマを芸術化するためには、urbanize された、時としては墮落さえした手法では殆ど不可能な事だったからである。彼よりも若くはあるが、同時代の今やあまり怒ってもいない Angry Young Men の作家達が、社会的関心を前面に押出して反体制的な姿勢を保ち、時としては積極的な組織参加をすら試み、スマートな諷刺、深刻すぎない自己疎外、限度内の怒りなどを軽快なタッチで picaresque ふうにえがいているのとは完全に無縁のところ、自己の芸術境をかたくに守りつつけて来たのは、同時代からの影響遮断によって、「自分の小説を創始しよう」とした努力のあらわれであり、執拗なまでの独自性の主張に外ならなかったわけである。

Golding 自身としては、自分の小説は寓話とよばれるよりは、神話とよばれることを願っているようである。寓話は何か人工的なつくりものめい

た感じがするが、神話是一種の古代的感覚で、人類の全経験を総括する方法を暗示するから、というのがその理由のようであるが、それはともかく、彼が fabulist であることの危険と限界を自ら認めつつも、寓話形式に執着して来た理由は、被表現体である自己の主題がこの形式の制約条件のなかで十分に生かしきる事が出来る、という自信と、本質的に moralist である自分がとりわけ didactic な主題をとり上げる時には、それは適当に sugar-coated される必要がある、この場合それは fable という形式を置いて外にない、という事であった。<sup>⑦</sup> もちろん、寓話が純粋に想像力の産物であるからには、作者の意図通りの自由な構図が組み立てられる筈のものであろうが、大事な事は、その構図が背景となる人間経験を下敷とした恣意性のないものであること、寓意とそれが寓する事象との間に緊密な連繋があること、およびその寓意は限定された事象の上にあらわされながらも意味の上で外延的にひろがりをもたねばならぬこと、などである。

そこで、こうした条件をみだしながら、その対象が文明からの影響が最少限であり、社会活動が単純化して表現され、人物は後天的資質が十分に発現しない年齢層であること、などを考え台せると、おのずから、「南海の孤島での少年達の集団」をえがいた寓話という形式がうかび上がって来るわけである。Golding はウイースの「スイスのロビンソン」と、ステューブンスンの「宝島」に対する並々ならぬ郷愁を別のところでのべているが、<sup>⑧</sup>上にのべた目的にそう、最もふさわしい物語として、R. M. Ballantyne (1825-94) の *Coral Island* (1857) を mother story としてえらび、その楽天的なあかるい全体の調子は別として、食人種と海賊の話の部分だけはそのどいて、登場人物はそのまま拝借して、彼自身の言によれば、いわば二十世紀的に改作して、この作品をつくり上げているのである。大体において、このかりに island literature と名付けた一連の文学形式は、ひろい意味での Utopian literature の一部を占めながら、また *Gulliver's Travels* にみられるように itinerary literature とかさなる面もあり、或

は Conrad がこのんで用いた、人間の極限状況をとらえる閉鎖環境の文学としての側面もあるわけであるが、fable としての面からみれば、現代社会に対する一つの政治的解釈を bestiary 動物寓話のかたちで発表した George Orwell と、人間の形而上学的解釈を island novel の形で表現した Golding と、いずれも visionary literature の形式を用いてそれぞれに成功を取めている点、考え合せて興味深いものがある。

こうした経過をふまえて、作者が少年冒険小説に仮託して展開してゆく寓話は、主題と手法の選択のよろしきを得て、緊密な構成と隙のない状況設定の下で、対決的な二つの力の相剋が、力強い現実感を伴って、すすめられてゆく。話は、南海の無人島に、飛行機の墜落事故のために、イギリスの少年達が不時着するところから始まり、英国海軍の駆逐艦に救出される場所でおわるのであるが、その間、島の上空で真夜中に空中戦がある以外は人間社会とのつながりはない。物語の背後には原爆戦争が予想され(以下の数字は Capricorn 版 *Lord of the Flies* の相当頁数) (11)、空中戦があり (88)、それは共産圏諸国とどこかの国との戦争であり (149)、駆逐艦が遊弋している (185) のであるが、それらの事実はいずれも current world のこの島に対する最少限の投影にすぎず、その点では少年達の世界は人類文明とは完全に孤立した所在不明の孤島にあり、いわば island novel の常道をふんで、時間と空間をこえた一種の普遍状況を現出している。島の状態は、害獣はいず、気候温暖、野生の豚と果物があり、天水は豊富、持物としては眼鏡のレンズと大型ナイフがあるという、安全が確保され、食糧と水があり、最少限の文明の利器をもっているといった基本的生存条件がまず前提として約束されている。人間のほうは、死体となってパラシュートで不時着した操縦士と救助にやって来た海軍士官の外は大人は一人もいず、12歳の少年を先頭に、bigguns とよばれる年長組と、littluns とよばれる年少組に分けられるが、全体の数ははっきりしない。

これで舞台と登場人物は決定した。ではここからどのようなドラマがく

りひろげられてゆくであろうか。もとよりこの小説が寓話であるからには、むき出しのお説教もなく、理念の絶叫もなく、心理の陰影のひだを描写するわけでもなければ、自己疎外が深刻に語られるわけでもない。単純化された対決的な二つの力の葛藤が直線的に力強く展開してゆくだけのことなのであるが、それは、美貌で良識ある少年 Ralph と、みにくく狭量であるが意志的な少年 Jack との間の主導権をめぐる争いの形で進められてゆく。Ralph は一番最初に登場して conch-shell 法螺貝を吹きならして、皆をはじめて召集する立場に偶然たつた事や、最年長でもあり、おちついた人柄である事などから、最初の選挙で、この島の chief にえらばれる(19)。彼は強い個性の人ではないが、常識的な判断力もあり、brain-trusters である Piggy や Simon などのたすけを得て、次第に指導者としての自覚にめざめ、すぐれた統率力を発揮してゆく。一方ナイフをもった Jack は、意志的で強い性格をもっている上に、はじめから合唱隊の head boy として自分の組織をもっていた事もあって、次第に対立的な傾向を打ちだしてゆく。この場合、conch-shell は chief である Ralph の権威の象徴であり、人を呼び集める召集権と、発議権をふくむ議長職権と、すべてそれらの procedure のシンボルとなっており、また鞘つきナイフはのちに狩猟隊長となる Jack の力の象徴であり、殺戮の可能性を秘めた暴力と恐怖のシンボルとなっている。

さて、Ralph は冷静な realist である Piggy と Simon の助言を容れて、まずこの共同社会のルールを定め (29)、conch-shell の権威とその無制限強制流通力を確立し (29)、雨期にそなえて仮小屋をつくり (40)、救出されるための手段として焚火をたやきぬこと (33) などを申し合わせる。Jack のほうでは chief の選挙に破れてからは合唱隊を狩猟隊に改組し (38)、野生の豚狩りをはじめ、また救出用の焚火の番をひきうける (38) が、最初から異質の制服集団であったこともあって、次第に Ralph の統制から外れ、だんだんと関東軍のような存在になってゆく。そして、

Piggy の眼鏡のレンズを使って火をもやしつける事に成功した (36) のではあるが、何しろ豚狩のほうに刺激的で面白いために、あてもない焚火の番はつい忘れられてしまい、或日沖合を通る船をミスしてしまって (62) 救助のチャンス逃がした事などもあって、Jack と Ralph の対立は決定的なものになってしまう (50)。この場合、ここでいう焚火は chief である Ralph が自分達のおかれている状態を孤立的閉鎖状況であると規定し、そこからの脱出をまず第一のテーゼにおいた、いわば長期的展望に立って掲げた一つの理念のシンボルとなっており、またその理念を可能ならしめるものは、ナイフとならんで唯一の文明の利器である Piggy の眼鏡のレンズであり (それはすぐれた brain-truster である Piggy の知性のシンボルでもあるのだが)、象徴的には、一個の共同社会の掲げる理念と、それを可能にする機械文明を意味している。

ところが、理念なるものは一般大衆にとってはいつでも退屈なものであり、日常生活に直接のかかわりあいをもつものではないために、生活実感に訴えない抽象名詞よりは、即物的な生活の糧や生きる楽しみのほうが一般大衆にアピールしやすい。焚火の番よりは豚狩のほうに刺激が、技術的にも興味がわき、食糧へ直接つながるために、子供達としては (それはまた、他律的に意志決定をする、低次元のムードに流されやすい大衆がしばしば示す「conformity の現象」のシンボルでもあるのだが) ややともするとそちらの方向へ引張られがちであり、その上すぐれた agitator である Jack の雄弁 (抬頭期の独裁者のそれをおもわせるが) に煽動されて、ますます両派の対立は深刻になってゆく。Ralph と Jack, conch-shell と knife, poet と doer, 菜食と肉食, 権威と力, 理念と行動は、今や to be と to do の立場から、それぞれに知性派と野獣派, 政府と軍隊を従えて真向から対決してしまった訳である。

Ralph はここまでではともかく chief であり得た。一たん権威を自覚してからは指導者らしい直截な態度で指揮権を掌握していたのであるが、人格

的な統率力だけの指導者にありがたな、優柔不断な側面が出て来、決断に迷いが生じてくると急迫した事態に対処出来なくなり、無用の混乱を招き、はじめは素朴なルール意識に支えられていた conch-shell の取り扱いも次第に煩雑な手続ととられるようになり、無制限に通用しなくなってくる (84). そこへ一般の少年達の無思慮に乗じて Jack は次第に力をたくわえ、war-paint で顔に隈取りをえがき (58), 歌と踊りをつくり (69), 槍で武装し、真実を語る者を殺害し (141), いまやはっきりと軍隊的性格をおびて来るのである. ここでいえる事は、Ralph とそのグループは、すべての長所欠点を含めての democracy を象徴しており、Jack とその一味は遺憾なく Fascism をあらわしているという事である. Ralph は一般投票により首長にえらばれ (金髪で美徳の彼が一般の人気を集めて得票をかさねるといふのも、民主政体の選挙の parody を思わせるものがあるが)、衆知を集め、理性的結論に従って共同社会の理念を掲げ、ルールを確立し、権威を中心に秩序を定め、長期的展望に立って計画をたて、信念を以て無形の恐怖に対抗しようとして来たのではあるが、人心が彼をはなれ始めると、理念は低次元の欲望におされ、手続は red-tapism と感じられ、長期的展望は事態の激変に無力となり、決断力にはにぶり、説得力はなくなり、恐怖に動揺し、文民優位の原則はくずれ、軍隊は公然と権威に挑戦し、ついに *coup-d'état* で失脚してしまう事になるのである. 一方これに対して Jack のほうはあらゆるファッション的諸悪を寓するものとして描かれており、権力を頂点とする軍隊的組織の上に立って強力に破壊的活動をおしすすめてゆく. 思考は貧しく知性に乏しいけれども、その対抗論理は迂遠な democracy の理念をあざ笑うに足るほど痛烈であり、その制服のもつ没个性的示威は未組織の個人をおののかせるに充分であり、その強烈な独裁は人格的統率力しかない指導者を打ち斃すほどに強力であり、その軍歌とデモは遠いはあるかな原始の血を呼び醒す役割をはたし、衝動的であるが行動的であり、無思慮であるが明快であり、dogmatic であるが energetic



であり、今や本能の赴くままに雷同する大衆の心をとらえ、恐怖にかりたて、真実をかくし、*coup d'état* によって権力を奪いとってしまうのである。

一般的にいて権力をめぐる二つの集団の争いというものは、それぞれの集団が目標とする食糧、知識、権威、快適といったいろいろの生活価値（この場合、pig, lens, conch-shell, hunting に象徴されている）を獲得し維持しようとする紛争であり、この小説ではそうした生活諸価値の社会的配分体系の Ralph 側では維持、Jack 側では変革の要求があり、またそれぞれ相手に対する自分の側の配分体系への服従の要求があるわけである。具体的には、それは Ralph の側では理性的説得、叱責、Jack の側では身体的拘束、生命の剝奪又は威嚇の形を通じてであるが、こうした強制を現実可能にするものは、はじめは潜在的社会的圧力であり、のちには物理的拘束力であるとおもわれる。そうして、この物理的拘束力が単なる暴力とは異なるのは、その背後にある権力が妥当なものであり、また正義の実現として存在する配分体系の維持に必要なから発動される、という点にある。同時に、最終的には物理的拘束力をきめ手とする権力が、それへの服従を確保しうるのは、被支配者の側の心理に、服従への能動性があるからであり、また構成員の側でその社会的配分体系を一般的に承認しているからでもある。したがって、権力支配を維持するためにはこの一般的承認が必要なのであり、利益（豚肉）、社会的帰属意識の培養（war-paint）などによってそれを強化する一方、power seeker はその主観的欲求を集団の欲求として客観化すべくつとめるものである。かくして権力関係は次第に組織化し実践化されて強力なものとなり、権力の非常的交替現象である *coup d'état* の後では、権力手段の集中的表現である軍隊的機構の完成にまで発展していったわけである。

こうして二つの葛藤の図式はおおよそ完成したことになるが、ここで見落してならないのは、双方の側の brain-trusters の機能である。Ralph の

側ではレンズの持主である近視の少年 Piggy がそれである。冷静な観察眼と判断力を持ち、現実凝視に鋭く、書記役タイプであり、すぐれたアイデアマンでもあり、知性から来る勇氣のために無形の恐怖に対しても徒らに動揺せず、実証的で遵法意識がつよい人物なのであるが、どういうものか不思議と人気がなく、また制服の優越性に対して甚だもろく、非行動的で、従ってほとんど説得力をもたぬという存在である。今もし、Ralph と Jack の関係を、現代アメリカにおける *coup d'état* の可能性と democracy の危機をえがいたベスト・セラー小説 *Seven Days in May* (1962)<sup>⑩</sup> における大統領 Ryman と統幕議長 Scot の関係になぞらえてみるならば、Piggy の類型は、Ivy League の大学から White House 入りをする、Phi Beta Kappa のメンバーである秀才の国務次官補や大統領特別補佐官の中に容易に見出されるであろう。

Jack の副官は Roger である。はじめは引込思案で目立たない少年であった彼が、狩猟隊の一員となってからは、その暗い pessimistic な姿勢のまま急速に暴力へ傾斜してゆき、何か nihilistic な勇氣を発揮して Jack の有力な側近となり、Ralph の権威に対して公然と挑戦して、一種の錯乱状態から相手方のブレイン Piggy を殺してしまう。そして、その後は何か死刑執行人のもつ無気味な憂うつさを漂わせながら、かつての chief Ralph を駆りたててゆくのである。Piggy とくらべてみて、この Roger の姿は、組織にまき込まれて自己を見失ない、自意識と心理的抵抗感を押えつけ乍ら、人一倍残虐になってゆく、もとは気の弱いインテリの姿をここに見る思いがするのである。

さて以上二組の少年達の上に超越的に位置しているのは使徒 Simon である。彼こそはこの二つのグループの争いとは別のところで悪鬼のかしら Beelzebub とたたかって敗れる殉教者であり、又、この寓話の宗教的側面をとく鍵ともなっている。彼ははじめは合唱隊の一員として Jack の指揮下にあった弱々しい少年であったが、Ralph との啓示的な出会いによって

先発の探検隊にえらばれ (20), Ralph の支持者として小屋の建設に献身し (45), この島を蔽うあやしい邪気について予言したりする (47) が, 彼自身 epilepsy の発作をおそれてかジャングルの中で自分一人の場所をもち瞑想にふける (50). 何か宗教的な性格をおもわせるが, またこのジャングルの中のかくれ場は一種の教会のシンボルと見ることが出来る. 彼の哲学的な発言はしかしながら大衆の嘲笑をかうだけである (82) が, その意味深い言葉はよく考えてみると, この寓話の根本的な意味にふれていることがわかる. 例えば, 無智な子供達が騒ぎだした夜の怪物についても, Piggy のように合理的な判断から否定したりはしないで, 怪物はいる, それは我々である, という表現の仕方をする. 彼は予言者として, 怪物は恐怖が生んだ心理的幻覚であるとはいわないで, 仲間達が急速に獣性へ退化してゆくを見て, 彼等が「人間の根本的な疾病に冒されている」(82) こと, つまり人間の original sin. について語ろうとするのである. 幼年組の子供達がおびえている闇の中の怪物というのは, 実はパラシュートで不時着した操縦士の遺体なのであるが, Simon が怪物の正体をそれと見とどけるまでは, この怪物が無形の恐怖をかきたて, 不安動揺のもととなっており, そのこと自体が, T. E. Hulme のいう空間恐怖 space shyness のように, 人間が未知のものに対して本能的に抱く漠然たる不安, 恐怖をあらわしているものと考えられる. Jack はこの無形の恐怖に対して, 独裁者がよくやる独断的, 発作的な宗教的心情から, 野生の豚の頭を生贄として捧げるのであるが, その棒杭にさした豚の頭に無数の蠅がたかり, その豚の頭が蠅の王 Beelzebub となって, Simon に語りかけるのである. 蠅の王は即ち Simon 自身の姿であり, 人間性の奥深くに巣くっている人間性の悪そのものの顕示である. Jack にとってそれは異教の守護神であり, この島にとっては島のぬしであり, 子供達にとっては怪物であり, 人間の原罪のシンボルであり, story の構成から見れば超経験的な求心的機能をはたしているのである.

さて、epilepsy の発作から醒めた Simon は怪物の正体を見届け、真実をつげようとして、Jack のグループが豚狩の成功を祝って、war dance をしている円陣の中にくろげこみ、落雷と稲妻に原始の血を呼びさました少年達の手にかかって殺されてしまう。そしてはげしい土砂降りと強風にさらわれて、恐怖の根元であったパラシュートは死体もろとも沖合はるかに吹きとばされてしまう。雷鳴と雨のやんだ夜半、波打際の Simon の死体も、大空のどこかで引張りあっている太陽と月の索引にひかれて、静かにゆっくりと外洋へと流れてしまうのである。この Simon の死は自らも不完全な人間として原罪を背負った彼が、人類の救済をはかって、祈り、真実を告げて人々を恐怖から解放しようとして、ファッシュの集団暴力に殺されてしまったという意味があり、すでに原始の獣性に回帰してしまったこの島の少年達のつくる共同社会には少くとも神はいなかったのだという、神の不在証明の証人となっている。Simon の死後もまだつづくこの島の怒号と叫喚、渾沌と無秩序は、現代社会にすむ人間の普遍的状况のミンボルであり、神を失なった少年達の運命にはもはや滅亡しかないことをまざまざと示している。事実、Ralph をかり立てようとして放った火は業火となって、全土を焼きつくさんばかりの勢いでもえひろがり、追われて野兎のように逃げまわる一人ぼっこの Ralph の姿はまさに人類の明日の運命そのものであり、我々は眉をこがす思いでこの結末に接するのである。

そして救助の駆逐艦。皮肉にも、のろしではなくして放火した火が不審をよんで、あたりを游弋していたイギリスの軍艦が救助にやって来て、生き残った全員が救出されるのである。海軍士官にもとうまくやれなかったのか、と問われて Ralph はただ泣きじゃくるばかりであった。彼は人間の心の暗黒を、そして失われてしまった innocence を嘆くのである。Piggy は叡智であり、Simon は聖者であり、Jack は暴力であった。そして今、権威を失った Ralph は人間として、人類の運命に涙するのであ

た。

Golding はこの第一作につづいて、同じようなテーマの作品をユニークな形で発表しつづけている。 *Inheritors* (1955) では Neanderthal 人が *Homo Sapiens* によってほろぼされる話を、 *The Two Deaths of Christopher Martin* (1956) では Ambrose Bierce の *In the Midst of Life* の中の *An Occurrence at Owl Creek Bridge* を思わせるような手法で、 Pincher Martin が二回死ぬ間のおどろくべき精細な flash back が語られており、 *Free Fall* (1959) では、画家の自伝的回想の中で、自由な少年時代の *guiltless sin* と、不自由な大人の世界の *real sin* との移り変りを描いており、最近の *The Spire* (1964) では神の使命をうけたと自称する司祭が、尖塔の建設に狂奔する愚行を Babel の塔にも似た神をおそれざる人間の傲慢さとして語られている。この外にはエッセイ集 *The Hot Gate* が昨年出されたのと、二幕物のドラマ *Brass Butterfly* (1958) がある。其他、 *Times Literary Supplement* に *Sometimes Never* (1956, p. 761), *Soldiers in the Rain* (1960, p. 721), および、 *Encounter* に短篇 *Miss Pulkinhorn* (1960, Aug. p. 27) などを発表している。

この *Lord of the Flies* は1954年にかかれた時には、 E. M. Forter こそ年間の最優秀作だと讃辞を呈したけれども、 *T. L. S.* が書評欄でそれも短かく取り上げただけで、 *Time*, *Encounter*, *Saturday Review*, その他 *Hudson Review*, *Kennyon Review* など権威ある書評欄はいずれもこの第一作を見送ったのである。初版当時2500部が売れたにすぎないといわれているが、 *Time* と *Encounter* などは第二作の *Inheritors* から、 *Hudson Review* は第三作からとり上げるという程度の扱いをされていたのである。アメリカでは1955年 Coward 版で出されて2383部を売って絶版になっていたのが、 Ivy League の各大学の英文科の指定読書となった事から、また1960年から1962年にかけて Virginia 州、 Hollins College で訪問教授として講義したこともあって、急速に評判となり、ついに Salinger の *Catcher*

*in the Rye* の売れゆきをしのいだといわれている。いずれにせよ、中年をすぎて処女作を世に問うた点といい、時流に抗して古風な形式を墨守している点といい、およそユニークなゆき方を示す Golding は今後も筆力雄健、ダイナミックなタッチで、執拗に彼の favourite theme をかたりつづけてゆくことであろう。

註

- ① 英米文学史講座, Vol. 12, p. 29.
- ② cf. Gilbert Highet, *The Anatomy of Satire* (1962).
- ③ In answer to a publicity questionnaire from the American publisher of *Lord of the Flies*, he declared... (*Lord of the Flies*, Capricorn Books, Note, p. 188)
- ④ *sub specie aeternitatis* = under the aspect of eternity 「普遍的形態の下に」 (Spinoza).
- ⑤ T. E. Hume, *Speculations, Essays on Humanism and the Philosophy of Art*, (London: Kegan Paul, 1924) "Humanism"
- ⑥ *Lord of the Flies*, Capricorn, p. 189.
- ⑦ William Golding, *The Hot Gates* (London: F. & F., 1965), pp. 85 & f.
- ⑧ *Ibid.*, p. 106.
- ⑨ George Orwell, *Animal Farm*.
- ⑩ Fletcher Knebez & Charles W. Bailey II, *Seven Days on May* (New York: Harpers & Row, 1962)